



特集 - 復興 -

それぞれの歩み

崩れた農道、折れ曲がったモノレール、長期に渡った断水。

爪痕残る現場で

助け、支え合い、復興に歩み始めた人たち—



マイナスからの奮起

平成30年7月豪雨により園地に大きな被害を受け、作業に取りかかれたのは1ヵ月後。意欲を失いそうな状況の中でも、諦めることなく前を向いて進む姿を追いかけました。

た農道の応急復旧に取りかかりました。「地域のみんなが少しでも早く山に行けるように」その一心で慣れない機械を使って復旧活動に取り組みました。

とまどい、立ち尽くした

地元の活動が一段落し園地に行くことができたのは、発災から1ヵ月が過ぎた8月のお盆過ぎ。もともと木があったはずの場所には何もなく、モノレールやスプリンクラーも流され、山肌が露出しているだけという無残な姿が目に見え込みました。「この木、毎年いい実がなっていたんですよ」と流され枯れてしまった木を見つめ、とまどい、立ち尽くすしかなかった当時の心境を話してくれました。

約1ヵ月の遅れ

遅れた1ヵ月は、かんきつ農家にとって大切な時期でした。木には青々とした果実がなり始めたころ。この時期に行うのは、病気対策の防除作業や、良質な果実を選別する摘果作業です。

摘果作業は2段階に分かれ、第1段階では果実の肥大促進を目的に、小さな果実などを落としていきま

まずは地域のために

吉田町法花津で2世代夫婦でかんきつ農家を営む清家さん。吉田町法花津地区は、土砂崩れにより大きな被害を受け、清家さんの農園も9カ所のうち3カ所に被害を受けました。発災直後、自身の園地を気にかける間も無く、消防団としての活動に従事。その後は地区の農家らで協力し合い、何カ所にも分かれ崩れ

クラウドファンディング

平成30年7月豪雨による被害を受けて「宇和島市かんきつ農家復興支援プロジェクト(クラウドファンディング)」が、市とJAえひめ南などの協力により展開され、全国から支援を募りました。

支援金の活用として、第1弾では、農家が防除作業などに使用する取水ポンプおよび給水タンクを整備し、断水が続いていた時期の防除作業に活用されました。

今回は第2弾として、かんきつの出荷を迎えるにあたり、「宇和島かんきつの復興」をテーマにした段ボール箱を製作しました。

■産地と消費者の復興の架け橋に

JAえひめ南が使用する従来の赤箱に、県イメージアップキャラクターの「みきゃん」と「がんばろう宇和島！」の復興スローガンを印字し、手に取りやすい大きさとして3kg箱を用意しました。今後は小売店舗と連携し、試食宣伝販売などに活用する予定です。

段ボール箱の製作について、JAえひめ南の黒田組合長は、「産地と消費者の復興の架け橋になるようにとの願いを込め、親しみを持てるように考案しました。1人でも多くの人に手にしてもらい、産地復興の思いを届けたい」と話しました。



す。その後傷が付いたり、カメムシの被害に遭ったりした実を1つずつ落としていきます。その1つひとつが手作業なので、作業には非常に時間がかかります。本来であれば、9月上旬には第2段階に進んでいるはずが、第1段階にも踏み切れていない木もありました。

それでもやってくる出荷

作業が遅れたからといって、出荷の時期は待つてはくれません。出荷に向けて、家族総出で防除や摘果作業に取り組んでいます。防除作業に使用するスプリンクラーは、給水パ



イブが土砂に流され使用できなくなりました。それでも、重たいタンクを担ぎ、1本1本地道に防除作業を行います。それもすべて、愛媛のかんきつを毎年楽しみに待っていてくれる人のため、今回の災害で支えてくれた皆さんへの恩返しのため。たとえ時間がかかっても、いつもどおりに進まなくても、冬にはきれいな橙色をしたかんきつを皆さんに届けられるよう。

清家さんは前を向き、復興への新たな1歩を踏み出しました。



【支援者の自宅に運ぶ飲料水を取りに来た佐竹さん】

助け合い、支え合う

旧三間幼稚園を活用した地域住民の交流の場「もみの木」。
難しいことは助けてもらい、できることで手をさしのべる。
それぞれが助け、支え合う関係づくりを目指しています。
苦しい状況の中でも、復興を目指して助け合う姿がもみの木
にはありました。



【美沼子ども教室に参加した子どもたち】



もみの木って

もみの木は「みんなが使え、集まれる」場所。育児や介護などで苦労することなど、地域住民が主体となって解決していこうと、昨年から動き始めました。旧三間幼稚園の教室を利用して、介護予防教室を開催するなど、地域の人の交流の場として利用されています。

こんなときだからこそ もみの木の強みを生かそう

今回の豪雨災害では、気軽に集まれる場所という強みを生かして、支援物資などを受け入れる拠点となりました。多くの団体などから飲料水の提供を受け、民生委員や三間地区社会福祉協議会、介護事業所のヘルパーなどが協力し合い、高齢者の自宅などへ配達しました。

もみの木での取材をしている途中、理学療法士の佐竹さんに出会いました。佐竹さんは、高齢者夫婦の自宅にリハビリの支援に行く前に、飲料水を受け取るため、もみの木に立ち寄ったそうです。気軽に立ち寄れるもみの木の雰囲気は、それぞれが助け、支え合う関係づくりにつながっています。

みんなが使え、集まれる

断水の影響で放課後子ども教室を行っていた施設が利用できなくなり、もみの木の教室を活用して「美沼子ども教室」も実施しました。運営は地域団体の職員などが交代で手伝い、夏休み中の子どものための宿題を見守ったり、ときには一緒に遊んで遊んだりして過ごしました。

ほかにも、もみの木には近所の住民が世間話をしに立ち寄ることもあります。ふらっと立ち寄って悩みごとを相談したりと、地域の人たちが集まる憩いの場となっています。

復興に向けて

復興までは長い道のりです。1人の力だけでは立ち向かえません。皆で助け合い、支え合いながら歩んでいくことが求められます。

もみの木のコーディネーターを務める赤松さんは、「私たちだけではできないことでも、身近な人たちの協力を得てできるようになることがたくさんあります。1人ひとりが少し意識をするだけで、届かなかった支援が届くようになることをこの災害を通して再認識しました。今後も、そういった拠点にしていきたいです」と話します。

もみの木はまだ動き始めたばかり。今回改めてわかった「共助」の大切さを第一に、地域の人とともに歩み始めます。

※「もみの木」は、三間町に住んでいれば、どなたでも利用できます。利用には申し込みが必要です。

【申込・問合先】地域づくり推進事業所もみの木 ☎5812785

💡 普段はこんなこともやっています

■ 生き生き教室(介護予防教室)

市に住民票がある65歳以上の方が、筋力づくりや認知症予防を専門家と一緒にを行います。

【と き】毎週月・水曜日 午前10時～11時30分

【参加料】無料

【問合先】高齢者福祉課地域包括支援センター

☎49-7019